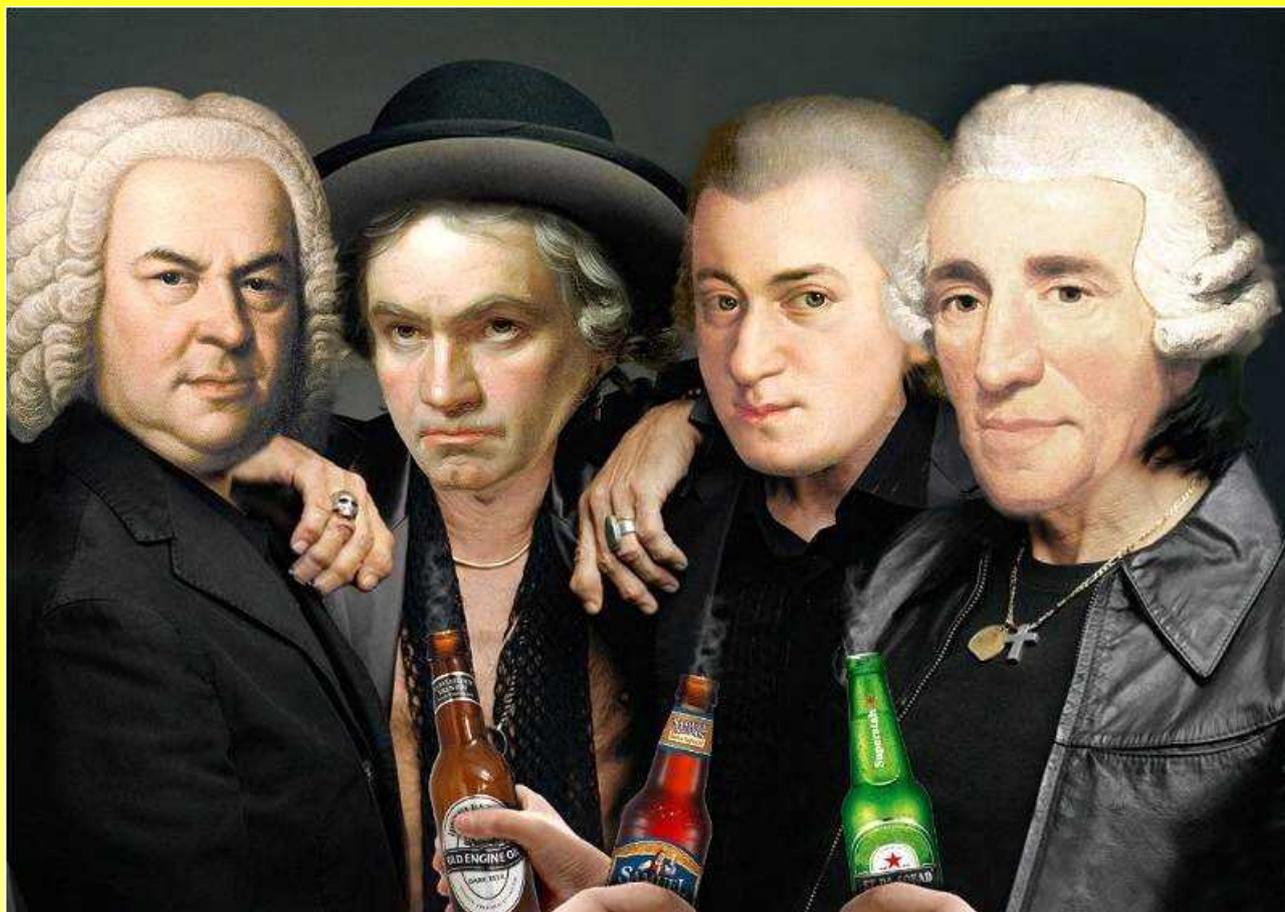


全曲を 全員で



これは、例会の当日、発表のあとで語った私、「顧問の講評」です。時間の都合で、語れなかったことも含めて、ここでまとめました。

みなさま、こんにちは。本日の例会もたくさんの会員のみなさまにお出でいただきありがとうございます。リヒテルの天敵、顧問の都築正道です。(笑い) 演題は「とっておきのCD これ1枚」で、会員の石川速雄さんが「リヒテルの魅力：チャイコフスキー『ピアノ協奏曲第1番変ロ短調』。ムラヴィンスキー&レニングラード・フィル1959年盤」、橋村光絵会員が「ヴィヴァルディの協奏曲集『四季』とドヴォルザーク『わが母の教え給いし歌』」です。

リヒテルの功罪

石川さんは大のリヒテル・ファンで、今回もリヒテルのCDをお選びになりました。リヒテルが晩年に日本にやって来て、1994年2月5日に名古屋でも最後のリサイタルを開きました。そのとき、1915年生まれの彼は79才でした。私も、楽しみに聴きに

行きました。当日のプログラムには、リヒテル本人の言葉で、今回のリサイタルの主旨が麗々(れいれい)しく記されていました。二つあります。まず、「私の音楽は耳で聴いて欲しい。目は邪魔なのでステージを暗くして弾く」と書いてあり、ついで、「ピアニストはリサイタルのために暗譜をするが、本来は曲作りに時間を割くべきであって暗譜のための時間は無駄だ。私は楽譜を見ながら弾く」とあります。なるほど、それも一理あります。でも、よく考えると、最初の主旨と二番目の主旨は相反するものであることがわかります。「さて、巨匠はこの矛盾をどう解くであろうか」と大いに興味がわきました。

リヒテル演奏の矛盾

リヒテルが登場しました。舞台は暗く、中央のピアノの上に小さなランプが付いていて楽譜を照らしています。主旨通りの結構(けっこう:構え)です。曲目は、グリーグの「抒情小品集」から二十余曲。期待した巨匠の指先から出てきた音楽は、なんの音楽性も独創性も覇気もない、楽譜を追いながら段取と手順で弾く、単なるたどたどしい老人の余暇の慰みにすぎないものでした。結局、いかな巨匠でも、主旨のあからさまな矛盾は解決されないままに終わりました。その通りを朝日新聞の音楽評に書きました。東京の音楽批評家のあいだでも評判になりました。リヒテルは、その3年後に亡くなります。

7 2版 1994年(平成6年)2月5日 土曜日 享月 日 楽庁 屋敷 (夕刊)

音楽

三人のロシアン・ピアニストを先月、続けて聴いた。

リリヤ・シルベルシュテインとリヒテルだ。ブーニンがパッパとペーター・ベントシヨパンをスタインウェイで弾き、リリヤはドビュッシーとラヴェルをペーゼンドルフ・ファニー・インペリアルで弾き、リヒテルはグリーグの「抒情小品集」から二十余曲をヤマハで弾いた。

感動の温度計は、リリヤを普通温に、ブーニンの沸点からリヒテルの水点までを示した。

ブーニンの才能と実力は相変わらず素晴らしい(一月21日・愛知県芸術劇場コンサートホール)。

長身をめぐつてかたがためにつかれたように弾き始める。もうどの音にも魂がこもり、最後まで無意味な音が一つもない。

この完結した演奏を可能にするのは、今の音を聴いて次の音の長さを決め、次の音のために今の音の長さを決めるという、手と耳

ロシアン・ピアニスト三様

感動のブーニン しゃ脱なりリヤ 失望のリヒテル



リヒテルのピアノ演奏会
II 愛知県芸術劇場コンサートホールで

フランス音楽固有の色彩と香りのゆらぎをそのままに、しゃ脱なエスプリを聴かせた。リリヤの波どろねるアルペジオにくすぐらわれてファンも心躍った(29日・三浦幸平メモリアルホール)。

いつからか巨匠リヒテルは、ステージを極端に暗くして、小さなライトで楽譜を照らしながら弾くようになった(31日・愛知県芸術劇場コンサートホール)。

「視覚が聴覚の邪魔をして聴衆の集中力を弱めないためだ」と彼はいた。暗譜は記憶力の競争を強いる無駄な努力だ」といふが、物覚えの悪い今時の音楽大学の学生でもそんな言い訳はない。楽譜を見ながらの演奏は、音楽を段取りや手順で弾くことになる。当夜のリヒテルの演奏はまさにそれで、暗いところから単調で精気のない音が聴こえてくる。まるで自動ピアノだ。

「弁証法だ。それで、演奏のブーニンは最高。ペルリシを中心に活躍するリリヤだが、印象派の夜明けを告げたラヴェルの「水の戯れ」と「鏡」か、彼の拍手が、裸の王様の仕上げてを上げた。

(都築正道)

(中部大女子短大教授)

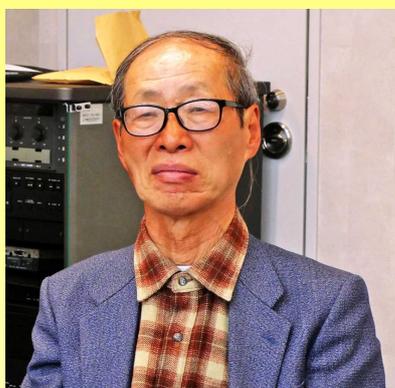
巨匠リヒテルの真価

むろん、リヒテルが巨匠であることは間違いありません。特に、私の愛蔵盤である、彼が弾いたシューベルトの『ピアノソナタ21番』の演奏のCDは、いまでもこの曲の最高の価値と尊厳を誇るものとして音楽界に君臨しています。このシューベルトの遺作となったピアノソナタは謎が多く、多くのピアニストの挑戦を退け、未完成のCDの山を築いています。私は、この難解なシューベルトの謎は、「即興性」と「試行錯誤」と「ピアノで歌謡的テーマを歌う」にあると見事に解いて、その成果を去年の5月に会員の岩田光義さまが館長を務めておいでの菰野ピアノ歴史館で講演をしました。モツ協の会員のピアニスト伊藤香紀(かな)さまが第1楽章だけ弾いて下さいました。私のお話も香紀さまのピアノも好評でした。特に、香紀さまの演奏は、私の「21番ソナタの謎解き」の話をお聞きいただいたあとだけに、素晴らしい名演奏でした。こ

のソナタが大好きな名古屋モーツァルト協会の会員も5名来ていただいていたので、ヤンヤの拍手喝采でした。むろん、香紀さんは、暗譜で弾きました。(笑い)

演奏は全曲聴く

さて、当日の石川会員のお話は、「演奏家の演奏は、全曲聴いてこそ意味がある。それで私はリヒテルの弾くチャイコフスキーのピアノ協奏曲を全曲聴きたいとおもいます」で始まりました。私たちは、発表者の意志を尊重して全曲演奏にお付き合いしました。でも、これは発表者の勝利でした。全曲聴いて初めてリヒテルの良さが分かりました。指揮はムラビンスキーで、オーケストラはレニングラード・フィルの1959年の演奏です。第1楽章が始まりました。例によって、ムラビンスキーのインスピレーションのない、音楽性も、ロシアの風土の香りもない、常に「イン・テンポ」(テンポを変えない演奏)で、訥々(とつとつ)とした音楽で始まりました。ソリストのリヒテルもそれに合わせて無味乾燥に弾いています。退屈です。この第1楽章の終わりには、ソリストのソロによる「カデンツ」(即興演奏:といってもチャイコフスキーが書いたもの)があります。リヒテルが自由に一人で弾くのです。彼は、このカデンツをおもむろにゆっくり弾き始めました。これまでのムラビンスキーとレニングラード・フィルの音楽を離れて、自分のテンポで、自分の表現で、自分の音で、チャイコフスキーの音楽を弾き始めました。おや、まあ！それが、なんとまあ素晴らしい！まさに、チャイコフスキーであり、ロシアであり、抒情と感傷があふれる名曲です。カデンツが終わったあとも、ムラビンスキーとレニングラード・フィルはこのリヒテルのロマンティックな音楽を守って奏き続けました。第2楽章も、終楽章も、リヒテルの音楽でした。素晴らしいです。発表者の石川さまの「演奏は全曲聴け」と「リヒテルは最高」いう今回の主旨がよく分かりました。ありがとう、石川さま。おめでとう、石川会員。



発表者：石川速雄さま



担当：月岡桂樹さま
司会：井元毅司さま 発表者：橋村光絵さま

聴いたけど、聴かなかった

実はこのとき、「リヒテルの演奏会を聴きに行きましたが、聴きませんでした」と書くかと思いました。そのとき、中世の歌人藤原為氏(ふじわらためうじ)の歌とそのエピソードを思い出したからです。

それは、つぎのようなお話です —

『続後撰集』にある藤原為氏の歌に「人間(と)はば 見ずとやいはむ玉津島 かす

む入江の春のあけぼの」があります。為氏は、歌人藤原為家の嫡男です。歌は祖父定家と父為家の教えを受けました。この歌の意味は、「人が尋ねたならば、私は見ませんでしたと言ってしまうか。この玉津島のある霞のこめた春のあけぼのの景色を」です。この歌については、為氏の子為世のことばの聞き書きとして、次のようないわれが伝えられています。すなわち、為氏が詠んだはじめのかたちは、二句が「見つとやいはむ」となっていました。それを父為家に見せたところ、為家は「つ」の傍らに「す」と書き添えたので、為氏はそう直して晴れの会に提出して絶賛を博しました — というのです。「見つとや」なら「見た」という肯定であり、「見ずとや」は逆に否定表現になるわけです。たった一字の違いがこの歌を大きく変えたのです。玉津島とは紀伊国和歌浦にあった小島です。これは『万葉集』の作者未詳の「玉津島よく見えています あをによし 奈良なる人の待ち問はばいかに」を本歌(もとた)としています。「奈良にいる人が待ちうけていて尋ねたらどうなさいますか」という本歌を受けて、為氏は、「見つとやいはむ」(ええよく見ましたよ)とそれに応答した形で詠んだのです。しかし、春霞たちこめる玉津島の入江の春景色の美しさは、見ぬ人にいくら説明しても分かりはしない。ならばいっそ、説明するより「見ず」と答えた方が、観念のなかにあるその美しさをそこなわずにすむ — と考えて為家は当歌に斧正(ふせい:人に添削をたのむ時の言葉)を加えたのでありましょう。(『和歌の解釈と鑑賞辞典』佐藤恒雄より)

でも、「聴きに行ったけど、聴きませんでした」では、読んだ人にはなんのことか分からないでしょう。

世に、「吉田茂メニューイン事件」というものもあります。名ヴァイオリニストのユーディ・メニューインの初来日は1951(昭和26)年9月15日で、最初の演奏会は9月18日午後7時開演。場所は東京の日比谷公会堂でした。2階正面の席には来賓のリッジウェイ GHQ 総司令官夫妻や吉田茂首相夫妻などの姿もあったそうです。その吉田茂が大磯の自宅にいるときに、よく朝駆けの新聞記者たちと雑談をします。「昨夜は東京へ音楽会にお出かけでしたが、いかがでしたか」と新聞記者の一人が訊きました。「うん、メニューインのピアノを聴いてきたよ」と答えました。翌日の新聞は、「日本の首相は音楽が分からず、有名なヴァイオリニストのメニューインをピアニストだと思っている」と書き立てました。数日後、ある音楽批評家が、「当日の演奏を聴いたが、本人の調子が悪く、ピアノの方が上手だったので首相はそういったのだ」と説明しました。批評も、「人を見て、法を説け」です。

女性の感性

つづいてのご発表は、橋村光絵会員のヴィヴァルディの『四季』とドヴォルザークの『わが母の教え給いし歌』です。橋村会員は熱心なモツ協ファンで、例会の出席率も最高です。特に、女性会員のなかでも音楽通で知られた方です。現在のモツ協の会員数は86名で男が61名、女が25名です。男女の比率は71%と29%です。なかなか良い数字です。世界のジェンダーギャップ指数で、日本は146カ国中、過去最低の125位でした。モツ協は女性も頑張っています。例会担当の井元毅司さまは、今回の女性の登場に大満足でした。堂々たるご発表で、「橋村さん、なかなかやるねえ」と政界の大御所ならずとも、全員から、その健闘への賛辞であふれました。ジェンダーギャップに触れるかも知れませんが、芸術的な感性では男性は女性に敵いません。いつも、パーティに出た帰りの車の中で、家内は、男女を問わず、色々な方の素敵なところを語ってくれます。お人柄や物腰や着ている物や装飾品まで、微に入り細にいつて誉めています。そのどれもが私が気がつかないことばかりです。女性の観察力は恐るべきものです。これは、芸術鑑賞についても言えます。「神と芸術は細部に宿る」 — です。

優しいバロック音楽

ここでも、『四季』を全曲聴きました。思い出せば、このヴィヴァルディの代表作は、バロック音楽の軽快な素晴らしさを、初めて、日本の音楽ファンにもたらしものでもありました。このイ・ムジチの演奏する『四季』の登場は、日本における「バロック音楽革命」とでも言っているものでした。それまでの聞き慣れたモンテヴェルディやバッハの厳格で重厚な「バロック音楽」と違って、同じバロック音楽でも、『四季』は、明るくて、軽快で、親しみやすく、「プログラム」（曲の標題）もついていて分かり易く、だれもが、たとえその人が音楽好きでなくても、心から歓迎する芸術です。『四季』によって、私たちの前に、親しみやすい新しいクラシックの世界が開けました。それを、橋村会員は、さも、懐かしそうに、嬉しそうに、話して下さいました。

音楽は母子の愛の繋がりも

また、今回の橋村さまのご発表によれば、音楽は、その美しさと華麗さだけではなく、女性だけが持つ親子の愛と美への感性の柔軟さと豊かさを誇るものでもあります。橋村さまのお名前は、極めて文学的で詩的なものです。「橋」は英語で「ブリッジ」(bridge)で、「村」は英語で「ヴィレッジ」(village)です。この2語は、見事に韻を踏んでいます。(笑い) それで二曲目は、ドヴォルザークの『わが母の教え給いし歌』で、親子の心の交流を描いた詩的で珠玉の名歌です。「この日本語名の『我が母の教えたまひし歌』は、英語名 "Songs My Mother Taught Me" からの訳であり、ドイツ語では、『老いた母さんが歌うことを私にまだ教えてくれた時』 "Als die alte Mutter mich noch lehrte singen" という題名と歌詞になっている」とものの本には記してあります。橋村さまは、「向田邦子のドラマでこの歌がチェロのソロで効果的に使われていました」と語り、当日は、ヨーヨー・マのチェロを聴かせて下さいました。音楽が、向田邦子の文学作品にまで思いが到って、普遍的な母子の愛情も詳しく優しく語るものであることを示していました。表現力溢れる音楽も、物語性豊かな小説も、女性の繊細な美的鑑賞に充分たえるものです。その日は、橋村さまのお嬢さまもご一緒でした。私は、歓迎の意を込めて、お二人に、ささやかながら(一本140円)、自販機で買って来たペットボトルの温かいお茶をマフ替わりに差し上げました。

一緒に音楽を聴くと言うこと

今回の例会のテーマは、「とっておきのCD これ1枚」です。なかなか良いテーマです。だれもが、音楽に感動すると、きまっただれかにも聞かせたくなるものです。なぜでしょうか？ 今回は三つの名曲を、それも全曲、集まった名古屋モーツァルト協会の会員40名ほどで一斉に聴くことになりました。たくさんの方が一堂に集まって、隣に他人がいながら、警戒もせず、目をつむって、耳をすまして、同じ音楽を長時間聴くことに、なにか特別な意味や意義があるのでしょうか？

人間が、相手に対して抱く善き感情には、大きく分けて「シンパシー」(同情)と「エンパシー」(共感)があります。ここでこうして、会員のみなさまとご一緒に同じ音楽を長時間聴くというのは、自ずから「エンパシー」を生むものです。お互いに、ますます親しくなります。親しくなるとどうだといえはそれまでですが、だれかが横にすることで、いまここに私も居ることに安心し、この社会で生きていることの希望と勇気が出てきます。いま、自分が好きだと思ふ音楽を、共に、美しいと感じ、優しいと思ひ、親しみをもち、賛同する他人がいるとおろそかにも思ったとき、それが、意外にも、真実であると知ったとき、その隣人との間に共感を生み、お互いに孤独ではなくなるのです。「徳は孤ならず」です。

幸せな主催コンサート

全員で聴くことのこの効果と効力は、名古屋モーツァルト協会の主催コンサートにも言えます。全員がそろって聴くことができる、私たちの作った、私たちのための音楽会が特別にあるというのは、なんと幸せなことではありませんか。仲の良いお仲間が集まって、好きなモーツァルトを演奏会で聴くことほど、至福の時はありません。それも、家族や友人を誘って一緒に聴くことほど、広くエンパシーを生み、会員としての自尊心を高め、達成感を満足させるものではありません。この3月に予定されている主催コンサートでは、話題の垣内兄妹のヴァイオリニストお二人によるモーツァルトの作品を中心にした演奏会です。主催コンサートはいつもいつも、満席ではありません。多少に、その名称からも、「会員だけのコンサートだ」という雰囲気はどこかにただよっていて、敬遠されているのかも知れません。内実は、極めて上質のコンサートであって、音楽好きの方々にとって、気楽に聞ける演奏会です。言ってみれば、ウィーンの「ウィーン楽友協会」(独: Wiener Musikverein)ならぬ、名古屋の「ムジークフェライン」(Musikverein: 音楽愛好家クラブ)です。その意味もあって、会員が、広く、音楽好きの友だちを、もっと気楽に誘わなければなりません。一度、おいでいただければ、直ぐに「エンパシー」を得ることができるでしょう。家族や友人には特別割引のチケットも用意されています。若い人たちのためには無料券があります。音楽好きの生徒や学生とそのご家族・ご友人のみなさまに喜ばれています。子供たちや孫たちもお連れになって満席にしましょう。NHKの文化センターで講座を持っている私は、10枚引き受けました。チケットを沢山売って、会場を満席にして、会長と幹事と会計を喜ばせましょう。名曲の名演奏を聴いて、家族も喜びます。友人も喜びます。そして、私たちも喜びましょう。近江商人の「三方よし」です。

再生力と適応

さて、私たちは、いま、資本主義と民主主義が危機を迎えているなか、物質的なGNP追求や覇権的な地位ではなく、精神的で自由な幸福追求の時代に入っています。ここでは、多くの人たちと共に生きるために、周りの自然に適応し、自然と共存する能力が問われることとなります。「自然は生産性ではなく再生力、効率ではなく適応によって成り立っている」(経済社会理論家ジェミー・リフキン)といわれます。私たちの周りにある音楽は、まさに、現代人に、常に、再生力と適応を促します。再生力とは、すなわち、競争のない「レジリエンス」(人間性回復)のことです。適応とは、「あるがままを許す」と言うことです。目にはまぶたがあって、見たくないものをさえぎることができます。口には唇があって、言わなくて良いことはいいません。しかし、耳には、まぶたも唇もありません。なんでも聞こえてきます。聞きたくないものも聞こえてきます。えり好みは出来ません。これこそが、私たち人間が、自然に対するのと同じ態度です。これからは、人間は自然をえり好みはできません。自然を、勝手気ままに扱ってはいけないのです。すべてを、あるがままに、あったがままに、受け入れなければなりません。山も、川も、海も、災害も、豊作も、絶景も、荒廃も、荒海も、湖畔も、地滑りも、柱状節理も、すべてを受け入れなければなりません。それは、音楽を全曲、ありのままに、みんなでそろって聴くことでもあります — それも、隣の人と一緒に。「汝の隣人を愛せよ」とはこのことを言います。(笑い)

オペラ観(み)に 赤の他人はなかりけり 舞麦(マイストロ)

【2024/02/06 都築正道】